

ず。日本・漢土の万国の諸人を殺とも、五逆・謗法なければ無間地獄には墮ず。余惡道にして多歳をふべし。色天に生こと、万戒を持ども万善を修すれども、散善にては生れず。又梵天王となる事、有漏の引業の上慈悲を加て生ずべし。今此の貧女が子を念ゆへに梵天に生。常の性相には相違せり。章安の二はあれども、詮ずるところは子を念慈念より外事なし。念を一境にする、定に似たり。專子を思、又慈悲にもにたり。かるがゆへに他事なけれども天に生か。

又仏になる道は華嚴唯心法界、三論の八不、法相の唯識、真言の五輪觀等も、実には叶べしともみへず。但天台の一念三千こそ仏になるべき道とみゆれ。此一念三千も我等一分の慧解もなし。而ども一代経々の中には、此経計一念三千の玉をいだけり。余経の理は玉にたる黄石なり。沙をしぼるに油なし。石女に子のなきがごとし。諸経は智者猶仏にならず。此経は愚人仏因を種べし。「不求解脱、解脱自至」等云云。我並我弟子、諸難ありとも疑心なくわ、自然に仏界にいたるべし。天の加護なき事を疑はざれ。現世の安穩ならざる事をなげかざれ。我弟子朝夕教しかども、疑ををこして皆すてけん。つたなき者ならひは、約束せし事をまことの時わするゝなるべし。妻子を不便とをもうゆへ、現身にわかれん事をなげくらん。多生曠劫にしたしみし妻子には、心とはなれしか。仏道のためにはなれしか。いつも同わかれなるべし。我法華経の信心をやぶらずして、靈山にまいりて返てみちびけかし。

疑二云、念仏者と禪宗等無間と申は諍心あり。修羅道にや墮べかるらむ。又法華経の安樂行品云、「樂つて人及び經典の過を説かざれ。亦諸余の法師を輕慢せざれ」等云云。汝此経文に相違するゆへに天に

すとてられたるか。答云、止観云、（夫れ仏に両説あり。一には撰、二には折。安樂行に不称長短とい
う如き、是れ撰の義。大經に刀杖を執持し、乃至、首を斬れという、是れ折の義。与奪途を殊にすと雖
も、俱に利益せしむ）等云云。弘決云、（夫れ仏に両説あり等とは○大經に刀杖を執持すとは、第三に
云く、正法を護る者は五戒を受けず、威儀を修せず。乃至、下の文に、仙予国王等の文あり。又新医禁
じて云く、若し更に為すこと有れば、当に其の首を断つべし。是の如き等の文、並に是れ破法の人を折
伏するなり。一切の經論此の二を出でず）等云云。文句云、（問う、大經は国王に親付し、弓を持し箭
を帶し、悪人を摧伏せよと明かす。此の經は豪勢を遠離し、謙下慈善せよと。剛柔頌に乖けり。云何ぞ
異ならざらん。答う、大經は偏に折伏を論ずれども一子地に住す、何ぞ皆て撰受無からん。此の經は偏
に撰受を明かせども頭破七分という。折伏無きに非ず。各一端を挙げて時に適うのみ）等云云。涅槃
 經疏云、（出家・在家、法を護らんに、其の元心の所為を取り、事を棄て理を存して、匡に大教を弘
めよ。故に護持正法と言う。小節に拘らざれ。故に不修威儀と言うなり。○昔の時は平かにして法弘
まる。応に戒を持すべし。杖を持すること勿れ。今の時は峻にして法翳る。応に杖を持すべし、戒を持
すること勿れ。今昔俱に峻なれば、応に俱に杖を持すべし。今昔俱に平かなれば、応に俱に戒を持すべ
し。取捨宜しきを得て、一向にすべからず）等云云。汝が不審をば世間の学者、多分道理とをもう。い
 かに諫曉すれども日蓮が弟子等も此をもひすてず。一闍提人のごとくなるゆへに、先天台・妙樂等の釈
 をいだしてかれが邪難をふせぐ。夫撰受・折伏と申法門は水火のごとし。火は水をいとう。水は火をに